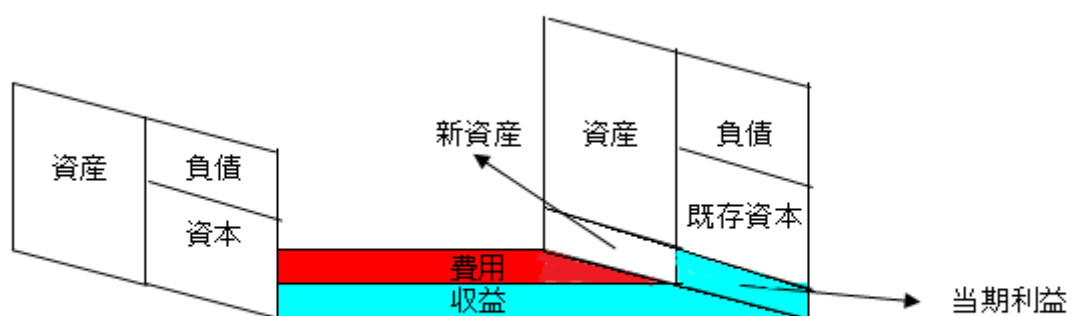
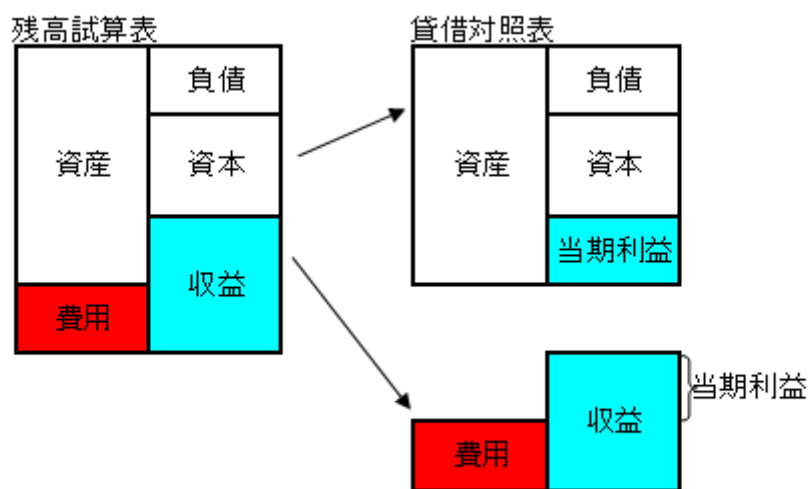


貸借対照表と損益計算書



調達と運用

資産とは

預金や有価証券、売掛金や商品、建物や機械などの固定資産がのっている
これらの資産は、「会社がお金をどのように運用しているか」を表している

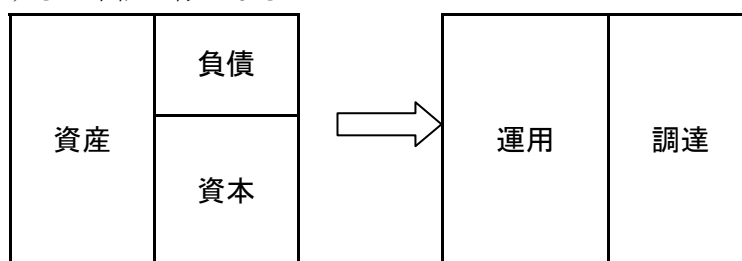
負債・資本とは

会社がどのようにお金を調達しているかを表す

負債は他人からのお金で調達している

資本は株主からのお金と会社に内部留保してきた利益である。

以上を図解すると下記の様になる



バランスシートは、何かの形で調達され、何かの形で運用しているのを表している。
もう少し深く思索するために、次は流動と固定で区分して考えてみる。

流動と固定の区分

流動資産とは

現預金や売掛金、棚卸資産、その他1年以内に現金化される資産をいいます。
これらは短期間に現金化されることから、短期の資金運用といえます。

固定資産とは

流動資産以外の資産をいいます。

たとえば、固定資産はお金になるのに長い時間がかかります。

流動負債とは

支払手形や仕入債務、一年以内に返済しなければならない短期借入金があります。

固定負債とは

長い間に返済する借入金です。

自己資本とは

ざっくりいってしまえば、返さなくても良い負債です。

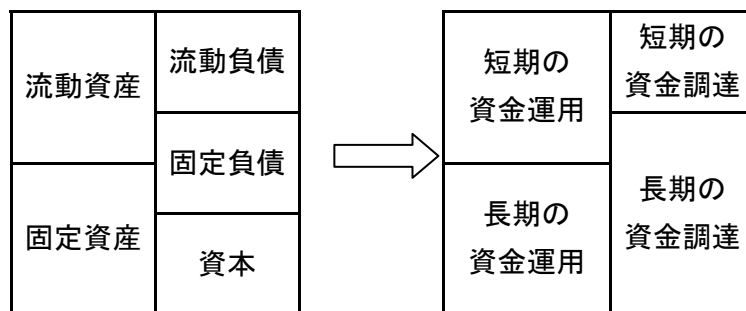
これは株主から払い込んだお金と、利益で内部留保されたお金を含みます。

これらのお金は株主から借りたものだともいえます。

しかし、基本的に返すことはありません。

だから、自己資本は返さなくても良い負債なのです。

上記を短期と長期の調達・運用に分類すると下記になります。



次にこの図を用いて短期・長期の調達と運用のバランスを考えて財務分析をしてみましょう。

長期の調達と運用のバランス

長期の資金運用 > 長期の資金調達のなるのが望ましい

長期の資金で賄いきれない部分を短期の資金調達で賄ってしまうと、すぐ返済しなければならぬので資金繰りが苦しくなります。

例として下記の様な会社があったとします。

(Mは百万円)

流動資産 100M	流動負債 300M
固定資産 500M	固定負債 100M
	資本 200M

この会社は設備投資の一部を短期の資金調達で賄っている状態になっています。

この様な会社は投資による収入金額よりも、返済している支出額が大きくなってしまっておそれが高く、資金繰りは極めて不健全だと考えられます。

資金繰りの基本・・・長期の資金の運用は長期の資金調達で賄う。

更に、長期の資金調達が、長期の資金運用を賄ってもなお余り、短期の運用にまで流れていることが望ましい。

流動比率と固定長期適合率

流動比率は $\text{流動比率} = \text{流動資産} \div \text{流動負債} \times 100$ で定義されます。

固定長期適合率は $\text{固定長期適合率} = \text{固定資産} \div (\text{固定負債} + \text{自己資本}) \times 100$ です

流動資産	流動負債
固定資産	固定負債
	資本

バランスシートを色分けしてあげると上記の様になります

流動比率は短期の支払い能力を見る指標であり、

逆に固定長期適合率は長期の資金運用を長期の資金調達でどれだけ賄っているかによって長期の安全性を判断する指標になります。

しかし、バランスシートを見れば一目瞭然ですが長期の支払能力と短期の支払能力は共に関係しているということが分かるかと思います。

つまり、固定長期適合率が100%を超えている場合は短期の資金調達によって一部長期の資金運用を賄っている状態であり、逆に言えば短期の支払能力も、流動比率は100%を割り込んでおり、短期の現金化される資産が短期に返済する必要のある負債を賄い切れていないことが分かります。

この様に、流動比率と固定長期適合率是对となる関係にあります。

他の重要な比率としては、固定比率、自己資本比率、インタレストカバレッジレシオがあります。

$\text{固定比率} = \text{固定資産} \div \text{自己資本} \times 100$ $\text{自己資本比率} = \text{自己資本} \div \text{総資本} \times 100$

$\text{インタレストカバレッジレシオ} = (\text{営業利益} + \text{受取利息} \cdot \text{配当金}) \div \text{支払利息}$

財務2級安全性分析

05年⑧

06年⑧

07年⑨

正味運転資本

正味運転資本＝流動資産－流動負債で表されます。

これは短期的な支払能力の側面を表しています。

また、長期的な面でも

正味運転資本＝（固定負債＋自己資本）－固定資産

としても表されます

正味運転資本は短期的な支払能力を表すと同時に、長期的な支払能力を表しています。

	流動負債
	100M
流動資産 300M	固定負債
	300M
固定資産 300M	資本 200M

正味運転資本

上記の例では、正味運転資本は 200M です。

流動比率も 300%と申し分ない数字です。

しかし、例えば流動資産中に定期預金担保が 100M あり、

当期に売掛金 100M の不良化が発生したとしたらどうでしょうか。

そうなると、流動比率は 300%ですが実質的な正味運転資本は 0M です。

これでは当社の財務内容はとても「良い」とはいえないでしょう。

この様に、流動比率の中には不良な資産も含まれているため、

実数分析として正味運転資本の検討も必要です。

ちなみに、正味運転資本の増減は後述する資金運用表や長期資金収支予定表で算出することが出来ます。非常に重要な概念ですので覚えましょう。

資金運用表

当期において資産や負債、資本が増減すると、調達と運用が前期と比べて増減します。

運用	調達
資産の増加	資産の減少
負債の減少	負債の増加
資本の減少	資本の増加

どのようにかわったのかを表にしたのが資金運用表といえます。

資金運用表は貸借対照表の前期と当期の増減額から作られます。

まず、資金運用表の作成の前段階として、比較貸借対照表をつくります。

比較貸借対照表

	前期	当期	増減		前期	当期	増減
現金預金				仕入債務			
売上債権				短期借入金			
棚卸資産				未払法人税等			
その他流動資産				その他流動負債			
有形固定資産				長期借入金			
その他固定資産				純資産			
合計				合計			

資金運用表を作る前に、科目を変えずに

長期の資金（固定資金）と短期の資金（運転資金）、財務資金（現預金と短期借入金）で単純に並び替えしてみましょう。

これを「簡易資金運用表」と勝手に名づけます。

簡易資金運用表

	運用		調達	
	固定資金	固定資産増		純資産増
固定資金運用			長期借入金増加	
			未払法人税等	
			固定資金調達	
合計			合計	
運転資金	売掛金増加		仕入債務増加	
	棚卸資産増加		その他流動負債増加	
	その他流動資産増加		運転資金調達	
	合計		合計	
財務資金	固定資金不足		短期借入金増加	
	運転資金不足			
	現金預金増加			
	合計		合計	

固定資金で運用か調達に過不足が生じた場合、

例えば調達よりも運用の方が多くなった場合は、固定資金調達という欄を作り合計額を合わせます。

帳尻を合わせるため、固定資金調達と同額分、財務資金の運用に固定資金不足の欄を作り同額記入します。

運転資金も同様です。

また、運用よりも調達が多くなった場合は、固定資金運用の欄を作り、合計額を合わせます。そして財務資金の調達の欄に、固定資金余剰の欄を作ります。

簡易資金運用表は単純に比較貸借対照表の差額欄を並び替えただけで作れるので簡単に作成できます。

ただし、この表だけだと何から調達して、何に運用されているのかが分析しにくいのです。

もう少し表に一工夫を加えたものが、本物の資金運用表となります。

資金運用表

	運用		調達	
	固定資金	税金支払		税引前当期利益
配当金支払			減価償却費	
固定資産投資			長期借入金増加	
固定資金運用			固定資金調達	
合計			合計	
運転資金	売掛金増加		仕入債務増加	
	棚卸資産増加		その他流動負債増加	
	その他流動資産増加			
	合計		合計	
財務資金	固定資金不足		短期借入金増加	
	運転資金不足		割引手形増加	
	現金預金増加			
	合計		合計	

まずは純資産増減から解説します。

純資産増減だけでは、調達と運用の源泉が分かりにくいです。

ところで純資産増減には

純資産増減 = 税引前当期純利益 - 税金支払 - 配当支払

という関係があります。これを図にすると

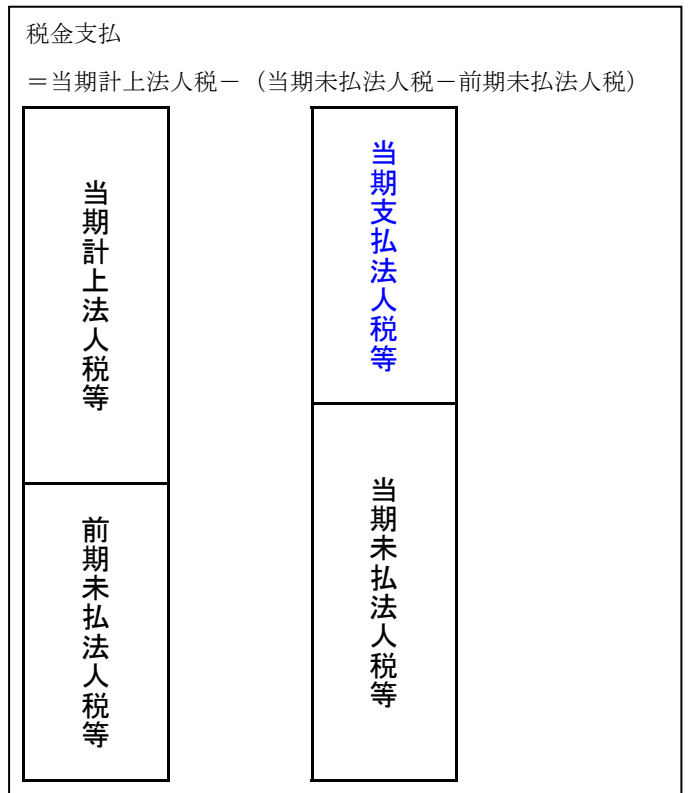
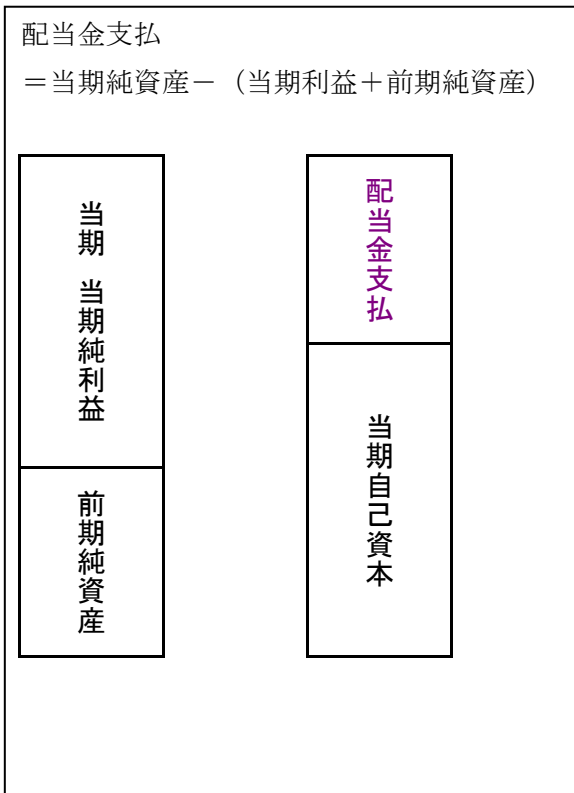
運用		調達	
		純資産増	



運用		調達	
税金支払		税引前当期利益	
配当金支払			

となります。税引前当期利益の方が、純資産増減よりも資金調達の源泉としてはイメージしやすいですね。

配当金支払と税金支払は計算しないと出てこないなので、下記の計算式を覚えましょう。



次に固定資産増減をみてみましょう。

固定資産投資の額の算出方法を考えます。

前期の固定資産額から減価償却費を引きます。

そうすると、もし固定資産投資を行っていないならば単純に当期の固定資産額は
 前期固定資産額 - 減価償却費となっているはずです。

でも、当期固定資産額がそれよりも多ければ、その分固定資産投資を行っているはずです。

つまり、

固定資産投資額 = 当期固定資産 - (前期固定資産 - 減価償却費)

となります。

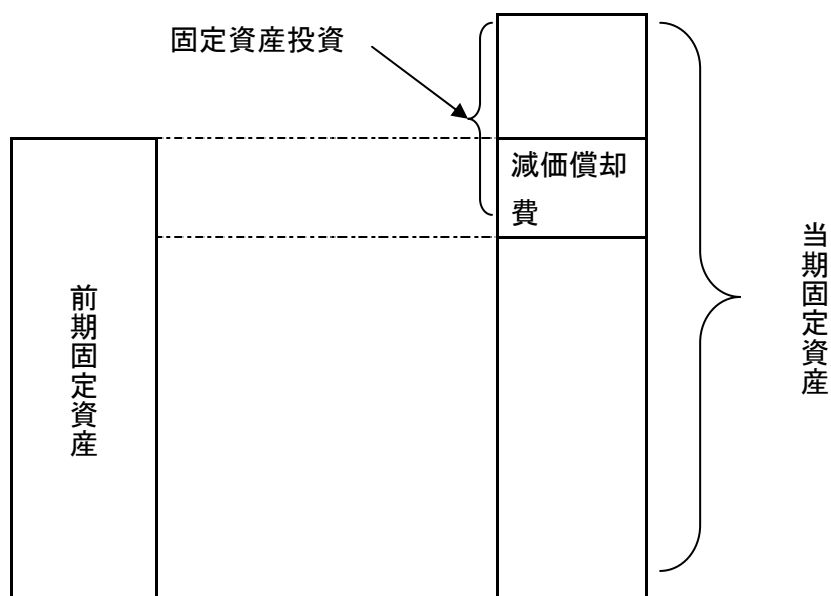
運用	調達		
固定資産増			



運用	調達		
固定資産投資		減価償却費	

固定資産投資

= 当期固定資産 - (前期固定資産 - 減価償却費)



運転資金の項

売掛金増加の欄には、割引手形増加額を加えます。
逆に財務資金の調達欄に割引手形増加額を記入します。
以上の操作により、資金運用表は完成します。

資金運用表の見方

財務分析の実践活用法

資金運用表による分析のポイントをご参照

財務 2 級

07 年⑩

03 年⑨

01 年⑨

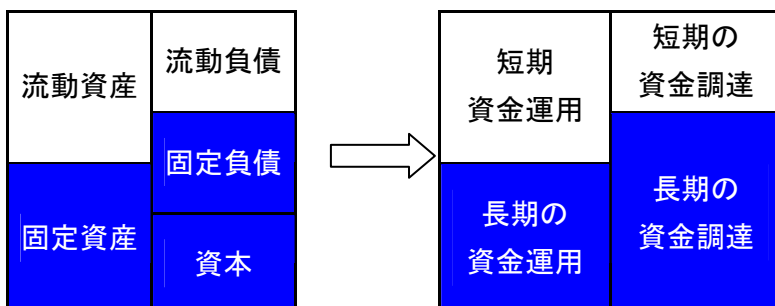
資金運用表と正味運転資本

正味運転資本増減額 = 固定資金運用 (調達) - 未払法人税増加 (減少)

長期資金収支予定表

長期資金収支予定表の構造

「長期資金」とは、固定資産、固定負債、自己資本のことをいいます。



(ここで勘違いしてはいけないのは、長期とは数期間という意味ではありません。)

「長期資金」収支予定表は、数期間の「長期資金」の増減を予想することにより正味運転資本の増減額を把握して企業の支払能力の有無を検証する手法なのです。

言い換えれば、長期資金収支予定表を作るということは、将来の固定資産、固定負債、自己資本を予想することと同じことなのです。

長期資金収支予定表の構造上、収支予定表の中に出てくる科目は全て固定資産、固定負債、自己資本の中のいずれかの科目です。